



発行所
公益社団法人 国民文化研究会
(九州←東京←全国)
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替 00170-1-60507
電話 03-5468-6230
FAX 03-5468-1470
http://www.kokubunken.or.jp/
E-mail: info@kokubunken.or.jp
月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料 年間2000円

記憶に残った合宿講義、「信じる」と知ること」 —五十年近く前にお聴きした小林秀雄先生の御講義—

飯島隆史

小林秀雄先生の御講義を初めてお聴きしたのは、大学三年生の時であった。五十年近くも前の第十九回合宿教室（昭和四十九年八月、於・霧島）での「信じる」と知ること」と題された御講義であった。

この時の参加者は調べたら学生だけでも三八〇名で、小林先生の御講義を直にお聴きしたいと思っ

て参加した学生も多かったはずだ（私もその一人だった）。当時の学生には、我が人生の意味を考へようとする気風がかなり濃かったのではないかとこの歳になって振り返ってゐる。小林先生の御講義だけでなく、班別での学生相互の遣り取りからも大きな刺激をうけたとの思ひが強いからである。小林先生の御講義の主旨は「人生とは何ぞや?」「人生の意味とは何ぞや?」といふことだったと思ふ。

この折の先生の御講義で強く記

憶に残ってゐるが、「現代のインテリは不思議を不思議とする素直な心を失つてゐます」として、ベルグソン、柳田國男に関して多く語られたことが印象的であった。ベルグソンについては、若き日にその「念力」に関する文章を読まれてゐたとのことであつた。ある夫人が夫の戦死する瞬間をまざまざと夢で見たといふ精神感應の例へば左のお話であつた。

「パリにゐたその夫人は、丁度その時刻に夫が塹壕で斃れたところを夢に見たのです。それをとりまいてゐる数人の兵士の顔まで見たのです。後でよく調べてみると、丁度その時刻に、夫はその夫人が見た通りの恰好で、(略)死んだのです。これは、夫人が頭の中に勝手に描き出したものと考へることは、不可能です。(略)夢に見たことは、たしかに念力といふ知らない

力によって、直接に見たに違ひない。さう仮定してみることは、何の不合理もないのです」(第十九回合宿教室記録「日本への回帰」第十集) 論理的に正しくて計量できることだけを「科学」は対象とするが、それで人生の本当の意味を掴めるだらうかと問はれたのだ。科学の進歩で「月に行ける」時代であるが「論語以上の智慧が現代人にありますか」とも仰つてゐた。

この時の御講義録はその後の小林秀雄全集や平成二十六年刊の『学生との対話』(新潮社)などに収められたが、本稿は「日本への回帰」第十集所載のものによつてゐる。

柳田國男については、その著作の『故郷七十年』から、十四歳の折の柳田少年の不思議な体験が次のやうに紹介されてゐた。

開けることが憚られた石造りの小さな祠を開けたところ、美しい蠟石が収められてゐた。それを見たことで「そこにしゃがんでしまつて、ふつと空を見た。実によく晴れた春の空で、真青な空にいつぱいに星が見えた。(略)その時鴉が高空でびいっと鳴いた。その鴉の声を聞いた時に、ぞつとして我に帰つた。(略)もしも、鴉が鳴かなかつたら、私は発狂しただらうと思ふと。ただ私はその後非常に生活の苦勞をしなければならな

かつたので、そのために私は救はれたのであると」(同前)。

右のやうな紹介に続けて、小林先生は「ははあ、これで柳田といふ人が分つたと思ひました。(略)民俗学も一つの学問だけれども、科学ではありません。(略)鴉が鳴かなかつたら発狂するといふやうなさういふ神経を持たなければ民俗学といふものはできないのです」と断言されてゐた。さらに柳田さんのお弟子さんの本は面白くないが、「柳田さんの著述は非常に面白い」。それは「かういふ感受性にあつたのだと気づきました」とも言はれてゐた。かうした物言ひに長く魅かれて来たが、何処から発せられるのだらうか。

さらに、今のインテリゲンチヤは「人類をどうしたらいいかといふやうな空疎なおしゃべりが多すぎますね」「諸君に言ひたいことがあります。信ずるといふことは、諸君が諸君流に信ずることです。知るといふことは、万人の如く知ることです。(略)信ずるといふことは、責任を取ることです」ともあつた。胸に刺さる凄しい御言葉だ。この御講義録を時折読み返して来たが、今回また一読して、この五十年近くの間、自分は如何に生きてきたのかと改めて顧みざるを得なかつた。(元りそな銀行)